



川系男子の『川と人』めぐり No.1 ～筑後川～

坂本貴啓（筑波大学大学院博士前期課程生命環境科学研究科 白川直樹研究室『川と人』ゼミ）

『川と人』 めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしょうがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などを紹介していきます。

1. 春の訪れとともに

筑後川の堤防沿いに菜の花と桜が咲く頃、筑後川を訪ねた。流路延長 **134 km**、流域面積 **2,860km²**、流域人口は **111 万人**の九州一の大河である。僕の母親はこの流域の出身で、筑後平野でとれた農作物と有明海の幸を食べて育った話を聞いたことがある。

筑後川に行くにあたっては経緯があった。とある冬の日の研究室で的一幕。「先生、福岡の川は周ったことありますか?」「時間をかけて周ったことはあまりないなあ。」「僕、地元なので、いらした時にはご案内しますよ!」「坂本くんが在学している間にぜひ行きたいなあ。」「じゃあ、桜と菜の花の咲く頃にぜひ。」このやりとりで今回の筑後川めぐりが決定した。それから冬の間はデスクワークに勤しみ、春が来るのを待った。福岡ではちょうど桜が満開を迎えた **4 月 4 日**、先生は福岡にやってきた。**3 泊 4 日**のスケジュールで筑後川⇒遠賀川⇒北九州市の川（板櫃川・紫川）をめぐるプランだ。それぞれの川をめぐるときにはそれぞれの案内人に説明をしてもらったので、その人らも一緒に紹介したいと思う。夕方に福岡空港を出発し、久留米市へ向かい筑後川の案内人を訪ねた。

2. 日本唯一の川図書館と歩く生き字引

久留米市高野。筑後川河川事務所や（独）水資源機構福岡導水事務所の近くに古賀邦雄さんの自宅がある。しかしただの自宅ではない。ここは「古賀河川図書館」と言われており、川や水に関する書籍が **1 万冊以上**ある(写真 1)。川や水の本でここに対抗できるのは国立国会図書館くらいだろう。古賀さんはもともと水資源公団（現水資源機構）にお勤めで、仕事の傍ら、書籍を集め、私費で集めた本は **8 千冊**を超える。転勤族でありながら、月日とともに増えるこの本を背負って引っ越すのはさぞ大変だっただろう。

2001 年に早期に退職されたのを機に、自宅を図書館とし、開放された。図書館ができてからは全国から、研究者、行政、市民団体、学生、漁協など様々な人が訪れている。また訪れる人の他にも、本を寄贈したいと申し出る人からの電話が後を絶たない。ホームペー

ジも充実しており、書籍の検索データベース、今月の新蔵書のコーナー、碑文が語る筑後川など個人管理の **HP** としては非常にコンテンツが多い。最近では古賀河川図書館文献研究会をつくり、全国から会員を募っている（詳しくは古賀河川図書館まで）。

まだ行ったことがない方はぜひ足を運んでいただき、本の多さに圧倒されてほしいし、余りのある川や水に関する書籍などは寄贈していただければと思う。そしてなによりこの図書館の主宰である古賀さんにぜひお会いになっていただきたい。古賀さんそのものがデータベースシステムのような方で、一言「筑後川」などと言うと、筑後川に関する本の紹介や筑後川の水管理の状況など解説付きで検索結果が返ってくる歩く生き字引なのでぜひお話をされると楽しいと思う。



写真 1 1 万冊以上の蔵書をもつ古賀河川図書館

3. 河口（昇開橋とデ・レーケの導流堤）

さて、そんな古賀さんの案内でまず向かったのは筑後川の河口。車の中で組曲「筑後川」（作詞：丸山豊、作曲：團伊玖磨）を聞きながら、河口を目指す。夕暮れ時の筑後川の土手を走りながら、「♪フィナーレをこんなにはっきり予想して～（最終楽章「河口」より）」の歌詞が流れると河口が近づく感激も一入だ。

着いたのは昇開橋。昇開橋は **1987 年**に廃線となった国鉄の佐賀線の鉄橋であり、現在は国の重要指定文化財として保存されている。行き着いた時には夜だったが、観光用にライトアップされており、川の真ん中に赤い橋が浮かび上がっていた（写真 2）。橋の真ん中から下流を望んだ。本来ならここに明治時代のオラン

ダム技術者、ヨハネス・デ・レーケが設計した導流堤がみえるはずだが、この時間はちょうど満潮で中央のポール先の青いライトしか見えなかった。構造物自体は見えなかったが、導流堤としての本来の機能を發揮している時間帯だと思うことにし、ここから河口まで6kmにおよぶ導流堤は心の目で感じ取ることにした。

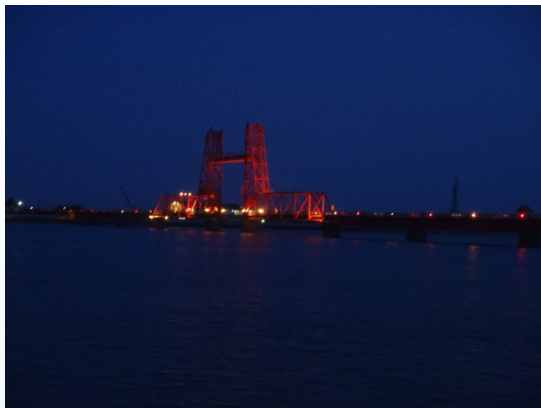


写真2 夜の昇開橋（橋下流にはデ・レーケ導流堤）

4. 有明海の珍味

導流堤をみたあと、久留米市へ引き返した。ここで夕食をとる。せっかく筑後川の河口をみたので、有明海の海の幸をと、古賀さん行きつけの有明海の珍味を出してくれる店へ。テーブルには次々と有明海でとれたちょっと変わった食材が並ぶ（写真3）。クツゾコ、メカジャ、ワラスボ、ワケンノシンノスなど聞いたことのないものばかり。店員のお兄さんが魚介類の生態や名前の由来など資料や現物とともにわかりやすく説明してくれた。ワケンノシンノスというのはイソギンチャクのことだが、こりこりと食感がよく、特においしかった。イソギンチャクはほとんどのものに毒があり、食用には向かないが、この種は砂の中で生息する変わった生態をもっており、食用として用いられるのだという。ワケンノシンノスの名前の由来をお兄さんが説明してくれたが、恐ろしすぎてここには書けないので、実際に食べに行かれた時に聞いていただきたい。あと、くれぐれも久留米市内でこの言葉を連呼しないようにとの忠告をうけた。有明海の珍味に舌鼓を打ち、風土料理を満喫した夕食だった。



写真3 有明海の珍味（ワケンノシンノス）

5. 河川図書館の夜なべ談義

今夜は古賀さん宅にお世話になることに。古賀さん宅に戻ってきた時には既に 23 時を回っていたが本番はこれから。本に囲まれての夜なべ談義をはじめた。今日巡ったデ・レーケの導流堤の話や明日行く上流のダム群の話、筑後川四大井堰の話など、話はあとを絶たない。古賀さんがふと、「坂本さん、ご自身の地元の川の地図が描けますか？」と言われ、思い出しながら書いてみることに。大きな支流まではかけるが、小さな支流、堰の位置などあいまいな部分が多い。すると古賀さん「手で地図が描けるようになることがその川を体系的に理解する一歩になると思うんです。これは私が描いたものです。」と古賀さんが手書きで描かれた筑後川の地図を取り出した（写真4）。手書きといえども、情報が細かい。流路はじめ、ダム、堰、導水路、河口からの地点距離などポイントが抑えられており、場合によっては筑後川管内図より見やすい。このやり方はその川を知る上で非常に頭にはいつてくるので、今度からまず川を描いてみることにしよう。夜なべ談義は日付が変わるまで続き、本に囲まれて夜は更けていった。

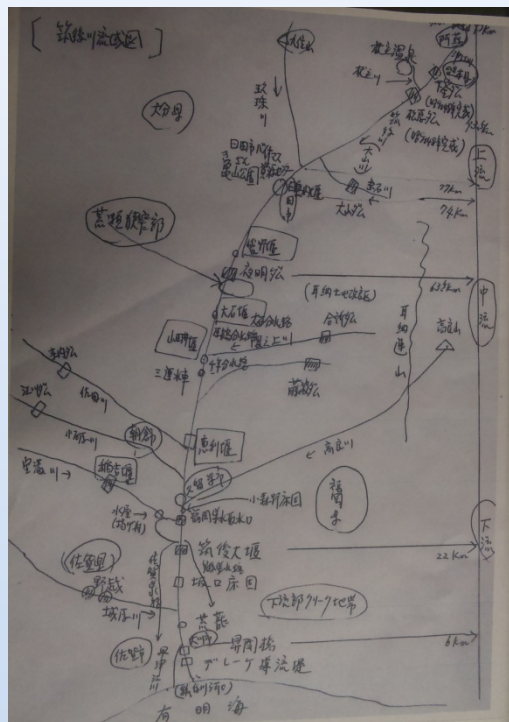


写真4 古賀さん手書きの筑後川流域図

6. 2人目の案内人

目が覚めると本に囲まれた部屋だった。「おはようございまーす。」支度をしていると玄関が開いた。今日上流まで連れて行ってくれる堤幸良さんだ。堤さんは昭和 28 年水害を筑後川で経験された方で現在は筑後川下流部のみやき町の町史の編纂をされてい

て、洪水史を担当されている。筑後川のことを色々調べているうちに河川図書館を訪ね、古賀さんともお知り合いになったという。古賀さん、堤さん、先生と僕の4人で上流に向け出発した。

7. 碑文が語る筑後川 貝を供養した碑

久留米市宮の陣付近の筑後川の旧河道のそばに石碑が建っている。「宮入貝供養碑」と書いてある。もともとのあたりに、ミヤイリガイという貝が生息していた。しかし、人間が川で遊んだり、泳いだりすると、この貝を中間宿主とし人間に感染する「日本住血吸虫症」という感染症が拡大したため、水路への薬の散布や河川改修、湿地帯の改善、水路のコンクリート化など様々な対策がなされ、昭和 58 年に撲滅を果たした。ミヤイリガイの生息が確認された最後の地ということで、供養碑が建てられた（碑文が語る筑後川参照）（写真5）。碑にはこう記されてある。

宮入貝供養碑(生息最終確認の地)

我々人間社会を守るため筑後川流域で人為的に絶滅に至らされた宮入貝(日本住血吸虫の中間宿主)をここに供養する。

平成2年(西暦2000年)3月建立

筑後川流域宮入貝撲滅対策連絡協議会

実は堤さんも幼少期に日本住血吸虫症に感染したことがあるそうで、現在は完治をしているが今も腹部に充血吸虫の遺骸が一部残っているという。堤さん曰く、このあたりは湿地帯だったそうだが、改修ですっかり変わってしまったそうだ。

貝を供養した碑をみるのははじめてであったが、人々が風土病に悩まされていて、深刻な問題だったのがよくわかる。



写真5 宮入貝供養の碑

8. 今に伝える水利施設 筑後川四大井堰

久留米市内を離れ、川沿いを上流に向けて走る。菜の花と桜堤が筑後川の春を演出している。今回の筑後川の目的の一つに江戸時代につくられた四大井堰をみることにある。下流から順に恵利堰、山田堰、大石堰、袋野堰だ。(袋野堰は夜明ダムにより現在は水没しているものの、夜明ダムの湛水区間であるため、袋野堰の取水口からは現在も取水されている。)

個人的には井堰の中で最も見応えがあった山田堰(朝倉市)を紹介したい(写真6)。山田堰は1790年に完成した石組みによってつくられた堰で、形態は筑後川を斜めに半分ほど締め切った斜め堰である。この堰の技術は現在アフガニスタンでも使われているという。ペシャワール会の医師の中村哲さんは医療支援だけではアフガニスタンの衛生環境改善に効果が薄いことから、インフラ整備の必要を訴えており、その改善策の一つとして、洪水にも強く、現地の人でも造築可能な山田堰の構造が採用されたようだ。

ODA等で最新の技術・素材でインフラ整備支援をするのは容易かもしれないが、現地の人が後々持続可能なメンテナンスをしていけるように、伝統的な土木技術で支援することは大変価値があると思う。この堰から取水された水は堀川用水として、流れていく。しかし、用水より高い位置に土地が広がっているため、水を引くのは大変な問題であったが、水流を利用し、自動回転の水車が開発され(1722年)、高地への水のくみ上げが可能となった。これが国の重要指定文化財に指定されている『朝倉の三連水車』である(写真7)。今回は農閑期であったため骨組みだけで回転していなかったが、灌漑期には12haの農地を潤している。当時の高い利水技術に感銘を受けつつ、さらなる上流を目指した。



写真6 山田井堰



写真7 農閑期の三連水車

9. 天領 日田と水

筑後川をさらに上流に遡ると日田市に入った。このあたりでは筑後川は三隈川と呼ばれる。日田は江戸時代、天領として栄え、商業の街として賑わい、その名残が今でも残っている。すぐ上流から玖珠川や大山川が合流してくるため、水が豊富であり、町の中にも水路が巡っている。お昼も回ったので豆田で昼食。ここは鰻料理が有名で、創業 **150** 年の老舗で鰻のせいろ蒸しに舌鼓を打った。

昼食後も日田のまちを散策。ここは古賀さんが水資源公団にお勤めだったころ、仕事でよく来ていたらしく、「ここの料理がおいしい」とか、「あそこの女将さんに仕事でお世話になった。」とか色々と思い出のある町のような。散策しながら、筑後川の展示のある日田出張所内の『朝霧の館』を訪ねた。ここの屋上からは筑後川の3川分派が見渡せた。川沿いには温泉街が広がり、川岸には鵜飼の船が停留しており、まさに水のまちにふさわしい景観であった（写真8）。



写真8 筑後川分派地点

10. 上流ダム群

日田市街地を出発し、さらに上流を目指す。上流には大山ダム（試験湛水中）と松原ダム、下笠ダムがある。

大山ダムは筑後川の支流の赤石川の支流、（独）水資

源機構が建設中の重力式コンクリートダムである（写真9）。

このダムは清流バイパスを設けており、ダムの上流の濁度の高い水を直接ダム直下を送る施設である（写真10）。これは筑後川の水環境への影響を考慮したものであり、全国的にも珍しい取り組みである。この清流バイパスがどの程度、ダムの影響を緩和する効果があるかは定かではないが、今後のダム直下流の河川環境を改善する一策として期待したい。まだ工事中であったため、ダムサイトには入れなかったが、完成後にまた来たいと思う。ちなみにここでもダムカードをいただいたが、カードには『大山ダム（建設中）』と表記されており、今だけの限定カードになりそうだ。

本川に戻り上流を目指す。このあたりでは筑後川は大山川と呼ばれている。このあたりの川をみると、岩盤が露出しており、川幅に対して流量が少ないような印象をうける。このあたりは上流に松原ダムがあり、減水区間になっているようだ。



写真9 大山ダム（試験湛水中）



写真10 ダム上流の清流バイパス取水口

松原ダムに到着。総貯水量 **5,460** 万 m^3 、堤高 **83m**、堤頂長 **192m**の大規模なダムである。しかし時間の関係で一瞬だけ目におさめ、ダムカードを管理所でもらってすぐに上流へ。本日最後の目的地、筑後川流域最大の下笠ダム（総貯水量 **5,930** 万 m^3 、堤高 **98m**、堤

頂長 248m)である(写真1 1)。松原ダムのすぐ上流に下笠ダムがあり、この下笠・松原の2ダムで筑後川流域の大半の水を貯蓄する。

ダムが一望できる高台に上るとアーチ式ダムの全体像がみえる。高台からダムを見下ろしながら古賀さんが静かに話しはじめた。



写真1 1 高台からの下笠ダム

1 1. 公共事業は法に叶い、理に叶い、情に叶うものであれ

昭和28年(1953年)の大水害を受けて、建設省九州地方建設局(当時)は下笠ダムの建設に着手する。しかし、測量に支障となる樹木の伐採をめぐり、地元住民の中心であった室原知幸氏らと些細な補償問題が起き、それをきっかけにして地元と行政側の関係はこじれていった。地元はダム反対でまとまり、対立は激化していき、ダム予定地に住民が交代で座り込みをし、建設阻止をはじめた。これが世に知られる蜂の巣城紛争である。下笠ダムの右岸側に砦を築き、斜面に有刺鉄線を張り、その光景はまさに蜂の巣であったという。室原さんらは自身らの墳墓の地を失いたくないとの思いから反対の意志を貫いたが、行政代執行により、砦は撤去され、ダム建設は進められていった。その後、室原さんは1970年6月29日に心筋梗塞のため死去。その年の10月末には和解が成立する。

今は山中にひっそりと構えている下笠ダムであるが、今自分が建っているこの場所にそんな悲しい歴史があったとは知らなかった。その時のことを忘れないためか、ここのダム湖の名前は「蜂の巣湖」と書いてある。古賀さんはさらにダム下流の山林の中に案内した。「ここは室原家のお墓です。ここに碑が建っているのです、この碑を読んでみてください。」碑にはこう記されてあった(写真1 2)。

現在の河川事業は本当に法に則ったものであるか、本当に理に叶った事業がなされているか、住民への情をもって仕事ができているか。この言葉は非常に重い。

そんな石碑をみて、今回の筑後川めぐりの旅は終了した。最後に『組曲筑後川 河口』の一節を引用して、筑後川めぐりに幕を閉じたい。

『筑後平野の百万の 生活の幸を 祈りながら 川は下る
有明の海へ』



写真1 2 室原知幸さんの碑

【筆者について】

坂本 貴啓(さかもと たかあき)

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。

筑波大学大学院 博士前期課程 生命環境科学研究科 環境科学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『郊外の湖沼・河川流域における社会変化に伴う流域管理のあり方に関して』と題し、流域の水質・水量の将来予測や河川市民団体の特性について研究中。最近のお気に入りには川の立体地図やダムカードを集めて眺めること。

